

現場の保育者・教育者から求められる
保育者養成学生の資質に関する調査

藤 重 育 子

愛知東邦大学

現場の保育者・教育者から求められる 保育者養成学生の資質に関する調査

藤 重 育 子

目次

1. 問題と目的
2. 調査対象者と方法
3. 結果と考察
 - (1) 保育者・教育者として大切にしていること
 - (2) 教職員自身が最も力を注いでいること
 - (3) 養成学生に望むこと

1. 問題と目的

保育者・教育者の質に関しては、現在多くの研究者が注目している。現場の研究において平野ら（2008）によると、保育実践ができるように保育者同士が互いに刺激し合って保育を展開し、互いの存在をプラスの連鎖で高め合い、育つ保育者が望まれていることや、保育者の保育力を高められる集団力は、保育と出会った時に保育集団の有能力が味わえ、個々の保育者の中に自己肯定感が育つのだと考えられている。また秋山（2011）は、「幼児教育職務実践力尺度」を作成する中で、保育者養成学生に自覚させるべき実践力の要となる「実態の把握」「正負の感情や考えを適切な形で表現するための指導・支援」、「園児の自発的な発見を促すための投げかけ」、「環境整備による支援」という4つの指針を見出した。さらに林ら（2012）は、現場に就職した養成校出身の学生が評価されていることと必要とされる保育者の質とを比較した。養成校卒業直後には責任感や協働性、コミュニケーション能力が重視され、3～4年後には「自ら指導計画を立てる能力」「全体的な状況を把握する力」「子どもの個々の対応力」といった、応用力や実践力が強く求められるようになると指摘している。先の研究において高原（2007）は経験年数1～5年の保育者では「雰囲気作り」を一番多く行っており、経験年数6～10年の保育者では「言葉かけ」の手だてが最も高かったことや、経験年数が浅いほど子どもに共感したり承認することで意欲を盛り上げようと配慮し、子どもの主体的な活動を重要視する傾向があることを明らかにしている。これらのことから、ひとくちに保育者・教育者の質という表現であっても、職務に携わる年齢や経験などから必要な資質は異なってくることがうかがえる。一方で基礎となる共通項目も見受けられる。例えば、「豊かな感性」という言葉が、保育所保育指針・幼稚園教育要領の随所にみら

れる（柴田，2012）ことから、子どもの豊かな感性と表現を伸ばすためには、イメージと動きをベースにした表現遊びを十分に実践させることや保育者自身が豊かなイメージを描き、子どもとイメージを共有できるような感性が必要である（高原，2007）。これに関連して平野ら（2008）は、伝えたいという感覚、表現手段は様々だが、伝えたい相手に表現することが楽しいという感覚を養うことを5領域の理解として持ちながら、自発的に生活や遊びを体験していく保育が要求されると指摘しており、保育者自身の意識の問題や、そのための訓練が養成校において必要であることが推察される。

養成校の立場から、学生の状況や授業に関連した保育者・教育者の質に関する研究も散見できた。小山ら（2012）は「教職実践演習」の中で、保育者教育者養成学生を対象に4項目37指標について自己評価をさせた。その結果、高い指標は「使命感や責任感、教育的愛情等に関する事項」「社会性や対人関係能力に関する事項」、低い指標は「幼児児童生徒理解や学級経営等に関する事項」「教科・保育内容等の指導力に関する事項」であった。このことから、保育教育現場において、先に述べた卒業直後に必要な資質に関して、学生自身も捉えていることが理解できる。森光ら（2012）は、これからの保育者としての資質や能力の形成にあたって、現在の学生のものへの捉え方を十分に把握し、学生の幼児教育に対する認識の実態を理解した上で、授業の取り組みをしなければならないと指摘している。そして井口ら（2013）は、授業内において実践を「振り返り・学び直し」たことが、保育観の形成に有効であったことを示している。さらに秋山（2013）においても、優れた保育・幼児教育者を輩出するためには、養成教育段階で、両資格・両現場の要素を含んだより多角的な視点と技能の獲得を促す必要性を訴えている。これらのことから、卒業前の段階で養成校の教員と学生が保育者・教育者の資質に関して十分に気にかけておく必要があると解釈できる。

以上のように、先行研究から保育教育現場職員の意見や保育者養成校の実態の把握ができた。また「保育実践演習」や「教職実践演習」等の授業科目における事例が散見できた。具体的には、保育実践演習に関して、学生と子育て支援センターとの連携記録（山崎，2012）や授業展開（鎌田，2012）などが、教職実践演習に関しては、授業報告（村松ら，2013）だけでなく、カリキュラム開発（武田ら，2013）や科目担当教員の意識に着目した研究（檜田，2013）など担当教員を対象としたものも手に取ることができた。様々な分析が行われ、保育・教職実践演習が注目され、期待されていることが十分に認められる。しかしながらその中では、「養成校」「保育教育現場」とそれぞれの方向から個々にたずねている調査が多く見受けられた。そこで今回は保育教育現場の教職員に調査を行い、具体的な事例を挙げて保育者・教育者の質について検討する。またその結果をもって、将来保育者・教育者を目指す学生指導の手がかりにすることを目的とする。

2. 調査対象者と方法

調査は、2013年10月～12月にかけてアンケート方式で実施した。対象者は、現場教職員である幼稚園教諭（5名）・保育士（5名）・小学校教諭（5名）の計15名であり、全て女性教職員であ

った。詳細を表1に示す。保有資格にはばらつきが見られたが、現時点における保育教育現場として記載した。年代については、30歳代が7名、40歳代が8名であった。経験年数については、現場経験年数が5年以下をA（4名）、6年～10年をB（1名）、11年以上をC（10名）と表記した。調査内容に関しては、まず「保育者・教育者として大切にしていること」について3点記述してもらい、その中で「自身が最も力を注いでいること」を1点挙げてもらった。同時にその中で「養成学生に望むこと」についてもたずねた。それぞれの回答結果から考察することとする。

表1 調査対象者の詳細

	現場	年代	経験年数
1	幼稚園	30	B
2	幼稚園	30	C
3	幼稚園	30	C
4	幼稚園	40	C
5	幼稚園	40	C
6	保育所	30	A
7	保育所	30	A
8	保育所	30	A
9	保育所	30	C
10	保育所	40	C
11	小学校	40	A
12	小学校	40	C
13	小学校	40	C
14	小学校	40	C
15	小学校	40	C

3. 結果と考察

(1) 保育者・教育者として大切にしていること

15名の対象者には、保育者・教育者として大切にしていることについて3点挙げてもらった。全45点を9つに分類し、まとめたものが図1である。

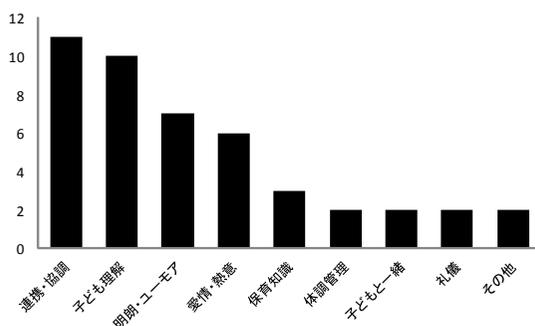


図1 大切にしていること

「連携・協調」項目は11名が大切であると考えており、全15名のうち多くの対象者が注目していることが分かる。内容においては、「連携」と記述されていたもの以外に、「ほうれんそう」「コミュニケーション」、「保護者対応」などが挙げられていた。次いで「子ども理解」項目10名には「子どものよいところを見つける」や「子どもの声に耳を傾ける」などの回答が見られた。また、多くの対象者が同じような傾向の回答であった。現場において大切なことは数多く挙げられるが、今回は特に数を限定してたずねたために、そのような結果になったと思われる。次に経験年数によって違いが見られるか検討した。「連携・協調」項目を挙げていた11名のうち、8名が経験年数11年以上の対象者であった。「子どもと一緒に」項目を挙げていた2名はどちらも経験年数5年以下の対象者であった。

また、「礼儀」項目には「感謝の気持ちを忘れない」「挨拶など礼儀を怠らない」という回答や「その他」項目には、「偏見を持たないこと」「自己責任」といった回答も見られた。

(2) 教職員自身が最も力を注いでいること

(1) の問「保育者・教育者として大切にしていること」において回答した3点のうち、対象者には自身が最も力を注いでいることを1点挙げてもらった。結果は図2に示す。

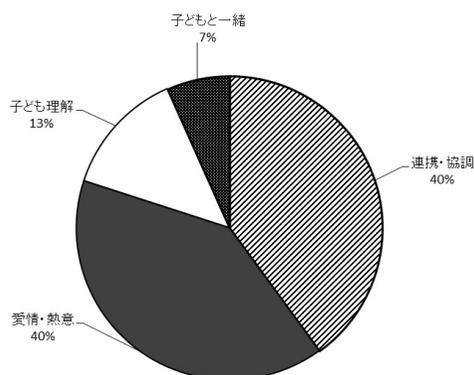


図2 最も力を注いでいること

大切にしていることでは、多岐にわたっていたが、「連携・協調」項目、「愛情・熱意」項目、「子ども理解」項目、「子どもと一緒に」項目の4項目に分類された。「最も力を注いでいる」ということは、重要度が増すだけでなく、日常の保育や支援においても頻度が高いことが把握できる。

多くの対象者が「連携・協調」の姿勢や「愛情・熱意」をもって、日頃から取り組んでいることを理解した。そして、(1) の回答において「愛情・情熱」項目を記述した対象者全員が、最も力を注いでいるということが分かった。

また、最も力を注いでいる点に関しては、具体例や理由などの記述欄を設けた。その詳細については表2に示す。同時に、前述した経験年数によって差が見られるかどうかを判別できるように記載した。経験年数11年以上の対象者についてのみ斜体で表した。

特に「連携・協調」項目においては、6名ともに11年以上経験のある保育者・教育者が回答していた。現場の種類に関わらず、経験者が大切に扱っている項目であることは理解できる。また内容においても、ほぼ全員が2段階の表現方法で示していた。例えば、「手元が忙しくても保護者の姿が見えたら一声かける」では、まず目の前の仕事などがありながら周囲を見回し保護者の姿を見つけること、そして声をかけるという行動である。「人の話をしっかりと聞き、素直な気持ちでいれば周囲は必ず手を差し伸べてくれる」では、まずは人の話に耳を傾けること、そして素直に受け取るという行動である。「壁にぶつかったときに、自分で悩み、考え努力も必要だが、同僚や上司にたずねてみる。自分の判断は正しいのか、この対応で良いかを、自分とは違った目線から見てもらふこと、意見をもらうことが大切である」では、自分で悩み考えた上で、周囲の意見に耳を傾けるという行動である。これらは、必ずしも誰もがすぐに実現可能ではないが、対象者においては、これまでの現場経験から導き出された回答であると思われる。そして、特に「教員同士、常に声を掛け合う二重の伝達」に関しては、保育所において生活はもちろん、子どもの命を預かり守るという必要がある。そのために、声を掛け合うだけでなく、二重の伝達を行うことで、失念や連絡ミスを防ぐことや再確認にもつながるだろう。

次に着目した点は、「子ども理解」項目である。両者ともに経験年数11年以上であった。こちらも先ほどと同様2段階からなる表現で記述されており、経験値から見られる点が多いように考えられる。ともにできないことより「できる」ことに対して指導や援助に携わっていることが見て取れる。経験を増やすことはもちろん、できるだけ楽しい出来事に遭遇させて子どもに感性や表現力に結び付けさせるための、あらゆる体験をさせてあげたいという気持ちの表れなのではないだろうか。

表2 「最も力を注いでいること」の詳細

現場	具体例や理由など
幼	手元が忙しくても保護者の姿が見えたら一声かける
保	教員同士、常に声を掛け合う 二重の伝達
連携・協調	保 「どうしたらいい？」とたずねる
小	人の話をしっかりと聞き、素直な気持ちでいれば周囲は必ず手を差し伸べてくれる
小	若い先生の発言の機会を奪ってしまわないように自分が先に口を開いてしまわないようにする 若い方から学ぶこともたくさんあるということを認識して、うまく引き出せるようでありたい
小	壁にぶつかったときに、自分で悩み、考え努力も必要だが、同僚や上司にたずねてみる 自分の判断は正しいのか、この対応で良いかを、自分とは違った目線から見てもらうこと 意見をもらうことが大切である
幼	運動会のマ스ゲームができない子どもに対して「集中力がないから難しい」と決めつけていたが 体操の先生が「絶対できる！」と言い聞かせ指導して、本番では立派に演技したことに感動した
幼	子どもが将来大きくなったときのことを考える 子どもが好きでなければ考えられない
愛情・情熱	保 「笑顔」「ほめる」ことが子どもにも自分にも効果的
保	お互いを思いやる気持ちから1日が充実したものになる
小	人と接することが嫌いな人は、本人もストレスに感じるし、子どもも敏感に感じ取り心を開かない
小	心に余裕がなければ、いろいろなことを見落とし、事が大きくなるまで気が付かない
子ども理解	幼 「分かった」「できるようになった」と思わせる体験を味わせることで自信につながり 自己肯定感を生む
幼	子どもの苦手なことを見つけたら、少しの変化も逃さないようにする 「できた」瞬間にほめたり声をかける
子ども緒と	保 「〇〇屋さんが開店します～」と興味があるものを商品にして〇〇ごっこを こちらが思い切り楽しむ

※ 斜体表記は現場経験年数11年以上の対象者の回答を示す

(3) 養成学生に望むこと

15名の対象者に(1)の回答3点の中から、「養成学生に望むこと」1点をたずねた。結果は4項目に分類することができ、具体的内容とともに表3に示す。(2)の方法と同様、経験年数11年以上の対象者が回答した具体的内容部分を斜体で表した。

表3 養成学生に望むこと

具体的内容	
<i>連携</i>	
連携・協調	協調性を持つこと
	伝える力
	コミュニケーション能力
人間関係	
<i>笑顔</i>	
明朗・ユーモア	笑顔
	心に余裕を持つこと
	明朗
<i>自分が楽しむこと</i>	
愛情・熱意	優しさ
	情熱
子ども理解	子ども理解
	子どもを信じる力
管理体制	健康であること

斜体は経験年数11年以上の対象者

5項目に分けられ、前述の「教職員自身が最も力を注いでいること」と比較すると新たに、「明朗・ユーモア」項目と「体調管理」項目が追加されている。養成学生には、明るく元気に保育教育に携わってもらいたいという思いが加わっていることが見て取れる「明朗・ユーモア」項目に関して、5名のうち4名が経験年数11年以上の対象者であった。これらから想像できるのは、実際に学生が実習期間中にしばしばご指摘を頂く点である。表情が硬く、実習生自身が楽しめていないと子どもも感じ取り関係性も構築できないであろう。次に、注目する点として、「連携・協調」項目に関しては、「教職員自身が最も力を注いでいること」への回答の6名全員が経験年数11年以上の対象者であったことに対し、「養成学生に望むこと」への回答の5名のうち3名が5年未満の対象者であった。このことから、連携することや協調性を持つことの大切さは理解しているため、後輩にあたる養成学生には持ち備えてほしいと考えているとも解釈できる。しかしながら、自身が先輩保育者・教育者と比較するにあたり、自身では最も力を注いでいるわけではないことも把握できている結果ではないだろうか。

4. まとめ

今回は、現場保育教育者15名を対象にアンケート調査を行った。アンケート内容として、「保育者・教育者として大切にしていること」を3点挙げてもらい、その中から「自身が最も力を注いでいること」、「養成学生に望むこと」についてたずねた。まず課題となったのは、対象者として依頼した人数が少なかったことである。また全員女性ということで、意見に偏りが見られたかもしれない。しかし、保育教育現場の、実際に子どもと関わる教職員から意見を得られたこと、その中でも経験年数によって大切にしていることや養成学生へ望むことに違いが見られたのは、よい収穫であった。そして、「自身が最も力を注いでいること」と「養成学生に望むこと」には、ずれが生じていることも明らかとなった。養成学生が卒業後に保育教育現場で勤務する際に必要なこととして、多く挙げられていたのは、「連携・協調」項目と「明朗・ユーモア」項目であった。志方（2006）は、先の研究において保育者の資質に「心身ともに健康であること」、「子どもに対する正しい愛情を持つこと」、「使命感・責任感があること」、「知性・教養があること」の4つを挙げている。しかしながら、今回の結果では、教職員または保護者との連携や人間関係に関する事項が大部分を占めていた。このことから、コミュニケーション能力を含む「連携」や「協調」といった内容は、子どもを保育教育する立場である教職員には前提条件なのかもしれない。経験年数に関わらず、チームで保育や教育を行う場面ではいずれも必要な資質であると捉えられ、子どもと正面から向き合い、また教職員同士も同じ方向を向いて保育教育にあたることが必要不可欠である。短期大学の保育者養成校では柴田（2012）が、子どもに触れる機会があるために1年生後半には各専門科目の講義内容を、自分の経験から結び付けて実感できるようになると分析している。養成学生においては、たとえ現時点で力を発揮できなくても、現在の経験が次回以降の演習や実習等で役立つことがあるだろう。また4年制の養成校であれば、比較的時間に余裕があり、自主的に実習やボランティアを通して保育者・教育者としての資質を身に付け卒業することが可能となるのではないだろうか。

最後に、アンケート調査を快諾してくださった対象者の方々に深くお礼を申しあげるとともに、これらの貴重な回答を今後より一層保育者・教育者養成に携わり活かしていけるよう努力していきたい。

【引用文献】

- 秋山真奈美（2011）現場で求められる幼児教育職務実践力とは？ - 幼児教育職務実践力尺度の作成を通して - 佐野短期大学研究紀要第22号 pp.129-141
- 秋山真奈美（2013）現場で求められる幼児教育職務実践力とは？（2）-「幼児教育職務実践力尺度」を作成するための調査結果における保育所保育士と幼稚園教諭の比較 - 佐野短期大学研究紀要第24号 pp.45-57
- 林悠子・森本美佐・東村知子（2012）保育者養成校に求められる学生の資質について - 保育現場へのアンケート調査より - 奈良文化女子短期大学紀要43巻 pp.127-134
- 平野仁美・小島千恵子・鈴木裕子（2008）保育の場における保育者の育ちあいⅡ - 遊び場面の実践記録検討を中心とした学び - 名古屋柳城短期大学研究紀要第30号 pp.125-138

- 井口眞美・生野金三・松田典子（2013）教職実践演習の実証的研究 - 保育観・授業観の形成を志向して - 実践女子大学生活科学部紀要第50号 pp.21-38
- 鎌田由紀子（2012）保育者養成校における「保育実践演習」の授業展開と一考察 江戸川学園人間科学研究部紀要第28巻 pp.147-158
- 樫田健志・高旗浩志・江木英二・曾田佳代子・三島知剛・後藤大輔・加賀勝（2013）全学教職課程における「教職実践演習に向けての取組」- 教科専門科目担当教員の意識に着目して - 岡山大学教師教育開発センター紀要第3号 pp.171-178
- 小山優子・栗谷とし子・白川浩（2012）保育者養成における「教職実践演習」の取り組み（1） 島根県立大学短期大学部松江キャンパス研究紀要第50巻 pp.53-62
- 森光義昭・関聡（2012）保育・教職実践演習（幼稚園）の授業展開と課題 久留米信愛女学院短期大学研究紀要第35号 pp.57-66
- 村松和彦・伊東明彦・加藤謙一・茅野理子・松本敏・丸山剛史・南伸昌・池本喜代正・由井薫・荏原寛一・永井明子（2013）平成24年度教職実践演習試行報告 宇都宮大学教育学部教育実践総合センター紀要第36巻 pp.1-8
- 柴田玲子（2012）研究授業「保育職基礎演習」の実施 研究紀要58-59巻 pp.211-228
- 志方俊江（2006）保育所実習指導の方向性を探る - 総合評価・総合所見及び自己評価を通して - 千葉敬愛短期大学紀要第28号 pp.153-162
- 武田明典・村瀬公胤・八木雅之・宮木昇・嶋崎政男（2013）教職実践演習のカリキュラム開発 - 初任教員のニーズ調査 - 神田外語大学紀要第25巻 pp.307-330
- 高原和子・瀧信子・宮嶋郁恵（2007）保育者の保育内容「表現」の関わりとその方法 - 表現活動を引き出す手だてについて - 福岡女学院大学紀要人間関係学部編第8巻 pp.57-62
- 山崎敦子（2012）保育者養成校の学生と子育て支援センターとの連携の在り方について - 「保育実践演習」におけるペープサートを使用した活動を通して - 東北生活文化大学・東北生活文化短期大学部紀要第43巻 pp.123-130

受理日 平成26年2月28日